



男はノートパソコンの画面を見ながら右手でマウスを軽く握りしめ、先程からほぼ十秒おきに神経質なほどクリックし、覗いているサイトの中の掲示板を更新し続けていた。

天の啓示……

そう思った瞬間だった。

男が思い描く世界の端緒が、そこに突然姿を現し、目の前で大きく開かれたのだ。

そのサイトの掲示板は、よく見かける他の掲示板とは少し違っていた。一つの書き込みに対する別人物からの投稿がツリー型になって呼応しているものでなく、時系列に従って書き込みが最下部に表示されていた。

一つの応答が成り立つ間に幾つもの違った書き込みが縄を糾うように振れて入り交じり、それに慣れるまでは、まるで脈絡のない意志の疎通に欠ける掲示板としか思えなかった。

いくつかの投稿はナンバーを冒頭に付けることによって応答が成されていることが、やがて分かって来たのだった。

その遣り取りの中で、投稿ナンバーを振らずに応答している内容に興味を持ったのだ。

余計な口を挟まれることを嫌がっているような応答が、錯綜する投稿の中に埋もれていた。

多分、両者にだけは互いの遣り取りが分かっているのだ。

これは使える……

そのとき男はそう思った。

その掲示板は、投稿時に作成した削除キーを使って、自分の投稿を掲載以後にでも削除出来るというものであり、その削除キーとしてメールアドレスを使うように管理者から指示されていた。しかも削除キーを入力ボックスに打ち込まない限り、書き込みの送信が出来ないというものになっていた。

普通なら投稿の必須条件としてハンドルネームとメールアドレスが義務づけられていても、削除キーは任意のものとして設けられていることが多かった。

しかし、その掲示板の仕組みがどういうものなのか、プログラマーでもない男に詳しく分かるはずもなかった。ただ、その構成に興味を持ったのだ。

その暗号キーの入力ボックスに、メールアドレス以外の適当な文字列を打ち込むと、「メールアドレスが不正です」とポップアップウィンドウが開いて警告された後、いきなり最大アクセス数を誇る検索サイトに強制的に弾かれてしまうという、そのシステムに男は驚くとともにさらに深く魅了されたのだ。

正当なメールアドレスさえ削除キーとして入力すれば、その送信ボタンがようやく機能する仕組みとなっていた。

管理者がメールアドレスの蒐集にどんな興味を持っているのか分からなかったが、何度か無意味な書き込みを投稿し、自分のメールボックスの様子を、しばらくの間注意深く窺った。

三ヶ月待っても、男の持つメールボックスに何らかのスパムメールが送られて来るようなことはなかった。

杞憂に過ぎなかった、男はそう思い、安心したのだった。

メールサーバーのセキュリティチェックも設定して置いたから、取り立てて気にするほどのこともなかったのだ。

その掲示板は、投稿に対して一から九九九までナンバーが振られ、その数をオーバーすると自動的に一からナンバーが再度折り返されるものとなっていることが説明されていた。さらに書き込みに対して、七行二百五十字以内の制限があった。それを何処かで見た記憶が微かにあったが、思い出せなかった。

その制限によってアスキーアートもどきの悪戯書き込みが投稿されるのを排除されているようであった。投稿に際して、メールアドレスを書き込むようになっていることも、悪戯の抑制のひとつとして効果があるのだろうと、男は思った。

掲示板の出だしの日付は、一定ではなかった。

それが投稿数によって過去ログへ移されるものなのか、あるいはサーバーの容量によるものなのかを、男はまるで分かってはいなかった。

さらに、過去ログに関する記述は見当たらなかった。

投稿が反映されるまで十数分の時間が掛かることを御了承願います

その掲示板の書き込み欄の小窓の下に、そう書かれていた。

最初、そのタイムラグが仕様なのか欠陥なのか、男にはよく分からなかった。

ぼんやりと掲示板を閲覧していた男は、そのタイムラグが存在することに気付いたとき、まるで雷に打たれたような、強烈な衝撃を受けたのだった。

全ては終わりのために……

そのとき不意に思ったのだ。

天啓という言葉はこういうことなのか、男は大きく頷いた。

それから執拗に更新を繰り返し、そのタイムラグがどういうものを詳しく知ろうと試みていたのだった。

それが意図的に作成されたものであるなら、その作成者は素晴らしい創造力と想像力を併せ持った人物に違いなかった。

男はマウスを素早く操作し、ブラウザの更新ボタンとスクロールボタンとを交互にクリックしスクロールさせる作業に夢中になって、その掲示板についての情報を探った。

その掲示板は、サイトの運営者が作ったものではなく、アフィリエイトを稼ぐためなのか、バナー広告を付けることを条件に無料で貸し出されているものであった。そしてサーバーの容量の関係なのか、過去ログは保存してはいないとの旨の簡単な断り書きが、目立たない隅に小さく付け加えられていた。

まさに男が考え続けていた世界が、在りはしないと諦めていた世界への扉が、大きく開かれた

瞬間だったのだ。

その掲示板に対して、何度かの無意味な投稿を用心深く繰り返し、悪戯メールなどのスパムメールが送られて来るかどうかを確かめ、見守った。

何も起こりはしなかった。

あるとき、何気なく読んでいたパソコン関係の入門書の、メールアドレスチェックの記事に目が留まった。

メールアドレスチェックのスク립トの記述は、単に文字列の中に@マークとドットマークが含まれているかどうかをチェックしているだけのものに過ぎない、そう記述されていた。

メールアドレスチェックといいながらも、メールアドレスが存在しているかどうかを問うているものではなかったのだ。

男はメールアドレスの入力欄に@マークを一個、その後の記述にドットマークを二個含んでいるだけの無意味な文字列を書き込んで、その掲示板への投稿を慌てて試みた。

その掲示板はその無意味な文字列を、メールアドレスとして受け付けたのだ。「アドレスが不正です」というポップが出ることも無く、検索サイトへ強制的に弾き出されもなかった。

しばらくの間、男はそれを半ば呆然として見つめていた。

そして男は今までの自分の迂闊さと馬鹿正直さを悔やんだ。

プログラムに疎い初心者はメールアドレスチェックに出くわせば、つい無意識のうちに自分の本物のメールアドレスを素直に書き込むに違いなかった。

しれっとした嘘を吐くことが出来る人間ならともかく、人間は日常の出来事に対しては案外と無防備で正直になっているものなのだ、そう男は思った。

男はすぐに自分のメールアドレスを変更させた。

男はプロバイダーのメールアドレスしか使っていなかった。

個人的なメールの送受信がほとんどない男は、取得していたフリーメールアドレスを使う場面がまるで無いということに気付いたとき、あっさり登録解除していたのだ。

フリーメールアドレスに多少の隠れ蓑的な意味合いを持たせるにしても、アドレスを取得するとき、結局は個人情報を書き込むことに抵抗を感じていたのだ。適当な住所氏名で申し込むことは可能だったが、メールによる登録終了確認にフリーメールアドレスを拒否しているサーバーがほとんどだった。

登録終了確認をプロバイダーのメールアドレスで実行する限り、そこから課金され口座から引き落とされるということで、司直の手にかかれば個人を簡単に特定出来るのだ。

不必要な登録が自分の個人情報の散蒔きにしかならないという意味合いに、そのときになって、ようやく気付いたのだ。

男に司直の手を逃れなければならない必然性も必要性もなかったのだが、それまでの間、自分がどれほど様々な分野で個人情報を無駄に散蒔いてきたかと思うだけでも、憂鬱になるほどだ

った。

普段から偽名を使ったり、架空の住所を周到に用意していることなどありえないのだ。

クレジットカード会社や銀行だけでなく、街角でアンケートに答え、署名活動に書き込み、レンタルビデオショップで登録し、それこそ行きつけの小売店や飲食店で無数に会員登録し続けた無用心さに気が付いた。

個別の情報を統合するなら、個人の消費生活、趣向や性癖までが丸裸になってしまうのだ。

最近では検索サイトがネット上の検索だけに止まらず、個人のパソコンの内部のファイルまでを検索出来るツールを提供し始めてさえいた。そのみならず、ウェブ上にファイルを保管するサービスまで提供されていた。銀行に金を預けるのと同じ感覚という歌い文句が男には理解出来なかった。

PCのOSのみならず様々なソフトがインターネット通信を持ち主の知らぬ内に繰り返し、アドウェアさえもスパイウェアと呼ぶならば、それが三百個近く男のパソコンの中にソフトと一緒にインストールされている事実もあった。OSやソフトのアップデートの度毎に、PCの状況を送信しているのだ。

ネットに接続した場合、受信のパケット量だけでなく、送信のパケット量も相当数あるということ自体の意味が、最初の頃男には分かっていなかった。

ウィルスチェックを定期的に行っているから、ウィルスや悪質なスパイウェアに汚染されているわけでもなかった。ただ薄気味悪さだけを感じるのだ。

知らぬ間に情報を遣り取りしている、その実行ファイルのいくつかは削除出来るのだが、大半は削除さえ出来なかった。

神経質にそれを削除するとソフトが機能しなくなるものもあったのだ。

自分が何処かのサイトを見ている裏で、何かが蠢（うごめ）いている薄気味悪さだった。

さらに、どのサイトを訪れようとも、アクセスカウンターの設置されていないホームページは、まずなかった。

そのアクセスカウンターによってログが採られ、アクセス解析を受けたにしても、それが直ちに個人の特定に至りはしないが、あまり気持ちの好いものでないことだけは確かだった。

プロキシサーバーを経由させる方法もあったが、それが目眩ましには成り得ても、プロキシサーバーの存在自体に、何かしらの抵抗感と胡散臭さを感じてしまうのだった。一体それが何のために存在するものか、他人を覗き見る興味もなく、普通に生活して来た男には皆目分からなかった。

その存在理由が何であるにしても、男は無償の善意の存在というものを全く信じていなかったのだ。男はパソコンを使ってこそいたが、プログラムを分かっているわけではなかった。

車を運転するのに運転免許は必要ではあるが、整備士免許まで必要なわけでもあるまい、そう思っていたのだ。

男は目立つことを何よりも望んではいなかった上、他人から興味を持たれることも望んではいなかった。

いつの頃からか、自分ひとりの世界に閉じ籠るようになっていた。暗い性格だった、ということではなかった。一步、外へ出れば、明朗活発な子供と言われて育ったのだ。

男はようやく見つけた、自分の世界へ近付く為のホームページを、念入りに作らねばならないことの必要性を感じた。

まず、メールアドレスチェックのことは、ほんの少し理解出来たつもりだった。次に、無用の訪問者を違うサイトへ強制的に弾き出すスクリプトの存在をも知ることが出来た。

一番肝心なことは、投稿の掲載にタイムラグのある掲示板を貸し出すサービスの存在を知ったことであった。

次に何が必要であるかを、男は考え続けていた。ホームページへの、検索サイトのロボット巡回を回避するのは、ごく簡単な構文の記述で済むことは既に知っていた。

ウェブ上のページからのリンク先を十階層まで辿り、そのホームページを一括ダウンロードすることが出来るツールが、最近フリーソフトとして公開されたことも、男は知っていた。

それを回避するために、男にとって必要であるものは、第一にファイルの暗号化ソフトであるに違いなかった。

公開されたホームページの中のファイル名が分かりさえすれば、画像であれ文書であれ、ウェブ上から検索しダウンロードすることは簡単なことなのだ。

だからこそ、HTMLの暗号化ソフトを探すことが絶対条件であるに違いなかった。

出来るだけ他人の知らないソフトを探さねばならなかった。

「矛盾」の語源のように相反するものを探し求めることは容易なことではなかった。

翻訳ソフトに頼り切ることしか出来ないが、日本だけでなく海外のフリーソフトをも、男は夢中になって検索し続けた。

確実に暗号化が為されれば、その解除キーさえない、未完成のものでもよかったのだ。

拷問にも近い苦痛を伴う、翻訳ソフトに頼った検索を繰り返している内に、ロシアのサイトから一つの暗号化ソフトを見つけることが出来た。それは一文字を任意の数の文字で置き換えるというものであった。ただ、それはまだ検証されていないという断り書きがされていた。

男はしばらく考え込んだ。

ロシアという単語から連想されるものは、極めて高度の能力を持ったハッカーが大勢居る、その程度でしかなかった。それをダウンロードすることは極めて危険なことであるかも知れなかった。

しかも、それが果たして日本語に対応するものであるかどうか、男の頭を掠めた。

HTML構文が英文である以上何とかなるだろうという、半ば蛮勇に似た思いで、思い切りよくダウンロードさせた。

セキュリティソフトは何の反応も示さなかった。

男はほっとした。

男のパソコンの中に価値のあるものなどなかったが、要は気持ちの問題であった。

子供の頃のアルバムから複製した何枚かの画像と、メールソフトのアカウント情報ぐらいはあっても、親も無く係累も友人も持たない男には、アドレス帳さえ必要なかったのだ。

普段閲覧するサイトのURLが「お気に入り」に登録してあっても、取るに足りないものでしかなかった。

男はいまさらながら、自分の存在感の無さ、影の薄さに、改めて溜め息を吐いた。

自分が何処か大気の中へでも拡散するように消えたところで誰の関心も引くことがないということだけ、理解出来た。

男はそのことに対して、何の感傷も覚えなかった。

さあて、男はそう呟いた。

ホームページ作成ソフトを開き、そのタイトルを付けようとして、キーボードの上で指を宙に浮かせて止め、考え込んだ。

自殺サイト、そこまで書き込んで、また指を止めた。

それが不適切な表現であることに、間違いはなかった。

「自殺サイトに導かれないために」そう書き直した。

また男は考え込んだ。

その言葉を右から左へとスクロールするスクリプトに書き換えて、何度かプレビューさせながら、フォントと速度を自分の好みに合わせた。

いつか閲覧して保存して置いた、何処かのホームページをファイルから開いた。

ページの中央へ子犬が駆け寄って来て、可愛く吠えるアニメーションのソースと画像を、コピーアンドペーストで自分の作成中のページに取り入れた。

著作権侵害かな、小さく呟いたが、そのまま実行するようであった。メタタグから長すぎるタイトルを外し、短いキーワードを幾つか書き込もうとした。

自殺サイト、それを書き込んでまたしても男は考え込んだ。

NPO法人、命の電話、相談室、自殺サイトに導かれなかったためのツール、心の相談室、心のホットライン、そこまで書き込んでから男は溜め息を大きく吐いた。

もうそれ以上のキーワードを思い付かなかったのだ。

それから一旦ソフトを閉じ、おもむろにレポート用紙を取り出し、検索サイトを呼出した。男は夢中になって、様々なキーワードで検索し、その結果をレポート用紙に手書きで写し出した。それに何日か費やした。

どこにそこまでの集中力があったというのか、そのことに男自身が驚いていた。

レポート用紙をまとめ上げた男はパソコンを開き、四十七個のフォルダーを作り上げた。そして再びトップページにプルダウンメニューを作り、そこからそのフォルダーの中のファイルにそれぞれリンクさせた。

トップページからリンクされた四十七ページの内容を持つホームページが出来上がった。

それは四十七都道府県別となっているものだった

男はそのプレビューから何度も各ページへのリンクを確かめた。間違いはなかった。

それぞれのページの上部には「自殺サイトに導かれなかったために」という言葉が、右から左にゆっくりとスクロールを繰り返していた。

各ページには、都道府県の県庁の電話番号、主要な警察署、市町村、福祉全般、ホットライン、健康相談室、NPO法人の各所在地と電話番号を詳しく書き込み、ホームページがあるところであれば、そのURLをハイパーリンクさせた。

男は何度もチェックを繰り返しミスのないことを確かめた。

それから、改めて作成ソフトを開き、一つのフォルダーの中に、いくつかの検索サイトのロゴマークをダウンロードさせてリンクさせた。それはリンクフリーとなっているものばかりであった。さらにいくつかの出版社のロゴを、バナー作成ソフトで作成し、表紙のメニューに「リンク集」を加えた。

それらがリンクフリーになっているかどうか、知りもしなかったが、勝手に作り上げたバナー

なら文句もあるまいと、一人決めしたのだ。そしてその中に同じ作り方でひとつのサイトのバナーをさり気なく付け加えて置いた。

「現代詩、現代における詩を考える」という飾り文字のバナーだった。

男は詩人を志していたのだ。

詩を書くということと、詩人を志すという言葉の間には大きな隔たりがあることに、男は気付いていた。

検索サイトで「現代詩」を試みに検索すると、一つ一つ閲覧することを躊躇うほどの検索数に、男は驚いたことがある。

男も御多分に漏れず、ひとつのホームページを作り上げ、ウェブ上に公開していたのだ。

それは、ホームページスペースをバナー広告の掲載を条件に無料で貸し出しているながら、規制の比較的緩い、有名なサーバーの中にあつた。しかもそのポータルサイトは圧倒的なアクセス数を誇っていた。

そのサーバーにサイトがある以上、ネット社会の離合集散の中で、ホームページスペースが突然無くなるという事態は考えなくても良さそうであつた。

それまでネット社会の買収劇の中で、四度ドメインが変わつた経験があつた。

そのサーバーなら、男の息の続く限り存続するはずだつた。

しかし、男のサイトを閲覧した者は、ほとんどなかつた。

アクセスカウンターの数もほとんど増えず、アクセスログから見ても、その大半を男自身がアクセスしていたという結果があるだけだつた。

迷い込む閲覧者が偶にあつても、再訪者は検索サイトのロボット巡回ばかりであつた。

男は微かに笑つた。

男はそこまでの作業で作上げたホームページに、既にウェブ上に公開しているホームページをリンクさせた。

ふと男は手を休め、メモ用紙に何かの図を描き始めた。

階層が浅過ぎる、そう呟いてそれまでの作業を中断した。

十階層のリンク先まで一括ダウンロードして保存できるソフトが無償配布されているのを、忘れてはいけないのだ。

十階層という言葉が何を意味するものであるかを、明確に知っているわけではなかつた。

ホームページのフォルダーの中の階層を示す言葉と解釈するしか、男の知識はなかつた。

まさか、他のドメインにリンクしたサイトの先までを辿る言葉ではあるまい、それでは余りに膨大に成り過ぎる、そう思ったが確信は持てなかつた。

どちらであるにせよ、階層が浅すぎるのは確実であつた。

フォルダーの階層の相関図を描き、階層を深くする方法を何通りかメモ用紙に描き込んだ。

男が知っている技法は、変わった技法を持つサイトを閲覧したとき、そのソースからスクリプトと思しき構文をコピーアンドペーストして取り込むという情けない技法だけであつた。

ああすれば、こうなるであろう、辛うじてそれが分かる程度の知識しか持ち合わせてはいなかったのだ。

何故そうなるかを、スクリプトとして理解しているのではなかったのだ。男は溜め息を吐き頭を軽く振った。

考えあぐねた後、フレームを使うことを思い付いた。

ブラウザの中にはフレーム排除の機能を持つものもあるが、それを無視して作り上げる以外の方法を知らなかった。

T字型三分割のフレームページを作り、メインページ以外の二つのページの幅を一ピクセルとし、フレームの枠を表示させないことにした。

さらにそのメインページに、幅一杯に広げたアイフレームを呼び出して、その中にさらにフレームで作った表紙を呼び出してみた。

さあどうだ、男はプレビュー画面を睨むように見つめながら呟いた。

狙い通りに表示された。

少しばかり読み込みは遅くなったが、階層は深くなった。しかも、それがフレームページとは、一目では分からない筈だ。

全てのページを、その作り方で設定することに男は決めた。

次の四十七ページも各々フレームで作り上げ、表紙のプルダウンメニューからはその四十七ページへのリンクだけとした。

それぞれのページの最下部にボタンを付け、「ツール集」と名付けた新しいページへリンクさせた。そのフォルダーは並列ではなく、一つのページのフォルダーへ直列に組み込んだ。

「ツール集」は、閲覧することさえも危ないと目される様々なサイトへ導かれなない為の、セキュリティの設置方法であった。それらは全てネットサーフィンしながら取り込んで置いた情報の抜粋の繋ぎ合わせだったが、「自殺サイトへ導かれなないためのツール」と表題を付けて置くことを忘れなかった。

そのとき男はステータスバーの存在に気が付いた。閲覧者のブラウザが、ステータスバーを表示させる機能をオンにしているとき、そこには呼び出し中のファイルの階層構成がフォルダー名と共に表示されるのだ。

ステータスバーの表示の排除を、適合性を以ってして考えなくてはならなかった。

ステータスバーの暗号化は可能だが、不適切な行為だった。

ステータスバーの偽装はフィッシング詐欺にも使われることから、セキュリティ機能に真っ先に引っかかるはずであった。

男はふと思い出した。

ステータスバーにメッセージを流しているサイトを取り込んで置いた記憶があったのだ。

ネットサーフィン中に取り込んで置いた、そのソースを記述したファイルを慌てて探した。

あった、そう声に出し、男は微かに笑った。

「あなたがいなくなれば悲しむ人がいます、思い止まって下さい、あなたの存在はあなた一人の

ものではありません、思い止まってください」

そのソースを貼り付け、考えたメッセージがステータスバーをエンドレスに流れるように、全てのページを作り直した。

その完成度を確かめるために何度もプレビューさせた。

ステータスバーを流れるメッセージを見つめ続けている男の表情が、何を思い出したのか険しくなっていた。

男は身じろぎもせず、じっとその画面を見つめ続けていた。

「ツール集」のページに「リンク集」のボタンを設け、作り置いたバナーばかりを並べたページをリンクさせた。

それもまたフレームページにすることを忘れなかった。

徐々に形が見えて来た。

その中のひとつである「現代詩、現代における詩を考える」のバナーにリンクさせたページとして、今まで密かに公開していた「現代詩」のテキストを一つに纏め上げ、取り込んだ。

稚拙だな、しばらくそれを見つめた後、男は呟いた。

何行か削除しようとして、ふと思いつまった。

その稚拙さも、絶対的に必要とされるものなのだ。

書けもしないような、ややもすれば読むことさえ出来そうもない難解な単語を並び立てただけの、詩を書いているという行為に満足しているだけの、パフォーマンスでしかないものばかりであった。誰が読んでも、そう思うに違いなかった。

男は自嘲気味に頬を歪めた。

たった一編のものでしかないのか、そう思ったのだ。

くだらねえな……

また呟いた。

しかし、それもまたサイトの完成には必要不可欠な要素なのだと、男は確信していた。

そのテキストを、下から上に強制的にスクロールするようなソースの構文を付け加えた。

作り上げたトップページをプレビューさせ、そのリンクを確かめた。表紙のプルダウンメニューからリンクされた四十七ページだけを並列にして、それ以外の全てのフォルダーは直列の構成に作り上げることを忘れなかった。読み込みは遅くなっても、その階層は間違いなく深くなったのだ、男はそう思った。

そこまでの全てのページは、たった一つのページに辿り着くための表紙でしかない、男はそう考えているのだった。

その現代詩の最後に、導入しようとしている掲示板への入り口となるボタンを作った。

その掲示板へのボタンの為だけに、それまでの全てのページが存在しているのだ。

その掲示板に辿り着くであろう者は、それまで何度か設けられている篩（ふるい）を潜り抜けて来たことに気が付くだろうか、男はそう思った。

男は狙い通りの掲示板を設置するために、CGIの解説書を買求め、さらにネット上で検索を繰り返し、足りない知識を補い得ようとした。

フリーのCGIをアレンジ出来れば、何の問題もないのだ、男はそう思った。しかし、タイムラグを持つ掲示板の制作方法は見付からなかった。

男の極めて遠大な計画が頓挫しかけていた。

見つけている広告付きの掲示板では、興も削がれてしまい、男の計画に支障が出るのだ。

男は知恵を振り絞った。

広告付きの場合、その広告の表示を外しているような不正使用がないか、常にチェックされ続けるのだ。

掲示板の常連の中には、それを密告することに楽しみを見出しているとしか思えない、お節いな者も少なくなかった。

さあて、男は古風に呟いた。

広告掲載が絶対条件となっている、従来のホームページスペースをそのまま利用出来るのではないかと、思い付いたのだ。

掲示板は別ドメインにあることが重要だ、そう思った。

古いHPを、作り置いていた強制的にスクロールする「現代詩」に差し替えた。

そのとき、検索サイトのロボット巡回を回避するべきか、そこにアクセス制限を掛けるべきかどうか、男は逡巡した。

ここは様々な自己宣伝をしてでも、アクセス数を増やさねばならないページなのだ、そう思い直した。

あともう少しだ、男は自分を鼓舞するように呟いた。

「現代詩」をVGAサイズで作り直し、借り出した掲示板をVGAサイズより一回り小さなアイフレームの中に呼び出すように作り直した。

それこそ肝心要なのだ。

アイフレームの外枠に掲示板のバナー広告だけを表示させれば、一見では、貸し出し条件に合う正当な表示となるのだ。

あと一歩……

男は呟いた。

そのページを見ながら、画面サイズを変動させ、そのアイフレームの中に掲示板がうまく表示されるよう微調整を繰り返した。アイフレームの位置をうまく指定することで、はみ出すこともなく表示された。

最初に作っていたホームページの雛形を開き、その「リンク集」の中の「現代詩」のバナーに、別ドメインのそのページをリンクさせた。

作り続けてきた三分割とは思われないページのメインページのアイフレームの中に、別ドメインの誰も閲覧しなかったホームページが呼び出せた。

アイフレームのサイズと位置の微調整で、サーバーと掲示板の二つの広告が消えていた。

ほぼ完成したのだ。

表紙を経由せずにこのサイトを見た場合には、サーバーの広告バナーも掲示板の広告バナーも、契約規定どおりに表示していることになるのだ。

今まで検索サイトのロボット巡回以外の閲覧者など皆無に近かったが、これからはマルチポストにならないように自己宣伝を繰り返し、掲示板へのアクセス数を稼がねばならないのだ。

掲示板の設定画面を開いて、ログ表示数の設定を、少な目の三十という数にした。

それは掲示板がタイムラグを持っていると知ったときに、決めた設定数だった。

直接的に話題が展開していくことよりも、それぞれが錯綜して混乱するほうが、より望ましかったのだ。

さらに、アクセス数を増やすためには、稚拙な現代詩も撒き餌として必要なのだ。

その掲示板が賑わうためであれば、その詩に対しての悪口雑言でも何でも良かった。

むしろ辛辣な言葉遣いの方が掲示板をヒートアップさせる要因なのだ。それまでの無意味といえるネットサーフィンでの知識も、ようやく役立つというものだった。

さあて……

男は呟いた。

まず男の取り掛からねばならないことは、作り上げたホームページを暗号化し、アップロードさせることだった。

男は表紙となるホームページ中から、「リンク集」と名付けたページをダウンロードしたソフトで試験的に暗号化した。

それは翻訳ソフトに頼り切った、忍耐を要求される作業であったが、実行すれば男の理想とする暗号化が出来る筈だった。

それをプレビューさせると、右マウス操作だけでなく、ツールバーの全ての操作、お気に入りへのページリンク、ページキャッシュが全て禁止されてしまっていた。

そのページを終了させるにはブラウザの終了ボタンを押す以外に、方法がなかった。

それを抵抗なく操作させる解決策を考えねばならなかった。

そのページに「終了するにはブラウザを終了させて下さい」との断り書きを入れておくことで解決出来るのではないかと、男はそう考えた。

「ブラウザを指定する」という項目があり、男はそこで手を止め、考え込んだ。

意味が分からなかったのだ。

暗号化の効かないブラウザがあるに違いなかった。そう思った男は、自身が使っているプレビューさせて効果のあった最大シェアを誇るインターネットエクスプローラーを選択した。

これは使える……

男は思った。

ステータスバーの表示も狙い通りの、流れるメッセージとなっていた。

暗号化していない、それ以前のページでも、メッセージが流れ、ステータスバーにURLが表示されることはなかった。

ここから呼び出す掲示板のURLが察知されることは先ずあるまい、男はそう思った。

男の見つめるステータスバーには、「あなたがいなくなれば悲しむ人がいます、思い止まって下さい、あなたの存在はあなた一人のものではありません、思い止まってください」のメッセージが流れ続けていた。

完成したのだ、男は思った。

男は新しく作った表紙としてのホームページを、契約中のプロバイダーのホームページスペースに上辞するつもりでいた。

ただ一つの欠点はそのURLが長過ぎ、長所は今まで使っていなかったということだった。

あくまでも五十ページ構成の表紙は「自殺サイトに導かれないために」存在する、善意に満ち溢れているものなのだ。

複雑な作成法であっても、誰からも文句の出るはずがないものに違いなかった。

最後にたった一つ設置されたボタンに気付く、どれ程の人間が居ようか、男はそう思った。

暗号化されたからには、ページ通りにしか進行出来ず、ブラウザの終了ボタン以外に終了する策は無いのだ。

篩を潜り抜けて、「現代詩」から掲示板に至るまで、どれほどのアクセスがあるか分からなかった。しかし、その道を辿って来る同調者こそ、男が待ち焦がれている相手なのだ。

稚拙な「現代詩」の辛辣な批評あるいは同調を、何処かの掲示板で適度に宣伝しなければならなかった。そこからの反応によって、投稿の錯綜する掲示板が出来上がるのだ。

多くても少なくてもいけないという課題が出来た。

例えるならば、初詣の境内を賑わす通行人が必要なのだ。

しかし、男が待ち侘びているのは、斎戒沐浴を済ませ、真摯な気持ちで参道を登って来る参詣者なのだ。

表紙もまた、何処かで宣伝しなければならなかった。

しかし、自殺防止目的の、善意に溢れたそのサイトの宣伝はそう難しいとは思えなかった。

強引な誘導は必要ないのだ。

放って置いても、水は高き処より低き処に流れるのだ。

「現代詩」のページの宣伝文句は思いのほか簡単だった。「死臭がするような稚拙な文体」「詩人ではなく単なる自殺願望者」「死に至る病に侵されたオタク」などと何処かの掲示板に投稿するだけで、男の設置した掲示板が賑わい始めたのだ。

閲覧や書き込みに抵抗感を抱かせないために、アクセスカウンターを設置しなかったが、表示されている投稿日時から、その進行具合は分かっていた。

そこに連なるハンドルネームは様々だったが、男が宣伝や自作自演の書き込みに利用したように、ほんの数人のものでしかない可能性もあった。

投稿が深夜帯になると増えることから、常連が居ついたに違いなかった。その背後には閲覧だけの訪問者もいるに違いなかった。いや、居て欲しかった。

ある日、「詩と死の間」その言葉だけを投稿してみた。しばらく様子を窺い、その反応としての自作自演の投稿を、さらに連ねた。

驚くほど食い付きがよく、沸騰するような投稿が入り乱れて錯綜し始めた。

最初に振った投稿が直ぐに掲示板から消えてしまった。もうその言葉は何処からも見ることは出来ないのだ。

この機会を逃してはならないのだ、男は素早く投稿した。

その幼児は微笑んでいた。

それが二歳児頃の一人で写っている写真であっても、男の記憶する家族がまだ存在していると思えていたときであった。

写真館のカメラの前で、三輪車に乗って走り回っている幼児だった男の視線の先には、それを笑顔で見つめている父親と母親が並んで立っている光景を、微かな記憶の中に残していた。

遠い記憶の中で、唯一懐かしい出来事であった。

ゴミ箱から拾い戻したその一枚の画像を、男はしばらくの間ただ見つめ続けていた。

家族の肖像として、その一枚が一番ふさわしいと、男は思ったのだ。

それからおもむろに、ワープロソフトを開いた。

パソコンやネットバンクや携帯電話のさまざまな暗号番号をテキスト文書にまとめ、一つのファイルを作成した。

そのテキストと画像を一つのフォルダーに入れた。

フォルダーを暗号化させようとして、復号化する手順の必要のないもっと簡単な方法に、男は気が付いた。

慌ただしく男はメール作成ソフトを呼び出し、そのテキストを本文とし、たった一枚残している画像を添付させ、メールを自分の携帯電話のアドレスに宛てて送信し、その二つのファイルをパソコンから削除した。

すぐに手元の携帯電話から、メール着信メロディが響いた。

その受信したメールを保存しておけば、必要な暗証番号をいつでも参照し、画像を見ることが出来るのだ。男の持っている携帯電話の操作は、最初に指紋認証かパスワードが必要とされるから、電池切れさえなければほぼ鉄壁の金庫なのだ。

男は満足そうな表情を、ようやく浮かべた。

それから何ヶ月かが過ぎた。

男は深夜になると、パソコンを開いて掲示板のURLを直接呼び出し続けていた。

男の書いた稚拙な現代詩は、死に纏わるイメージを表現したものばかりだったのだ。

「詩とすと死の間」その言葉だけを、まず投げかけた。

それに対する投稿を、自作自演で撒き餌のように散ら撒き、様子を窺った。その投稿に、閲覧の常連と思われる者たちが過剰に反応し始め、掲示板が熱を帯びて来たのが分かった。

今だ……

男は思わず呟いた。

用意して置いたフレーズを自分の掲示板に投稿した。
待ち侘びた瞬間だった。

誰か
僕と
一緒に
死んで頂けませんか

その後に携帯電話のメールアドレスを付け加えて置いた。
その投稿の為だけに存在していたホームページであり、掲示板だったのだ。
自分の投稿を済ませて、十三分を過ぎる頃からほぼ十秒毎にページの読み込みを更新させ、その投稿が掲示板に反映される瞬間を待った。
じりじりするような苛立ちの中で、男は左手側に置いてある携帯電話をいつでも手に取れるように身構えていた。

先程の書き込みからぴったり十五分後の更新で、男の投稿がその掲示板に反映された。
心配していたスペルの間違いがなかったことを確かめた。
男はその瞬間、読み込んだページをスクロールさせ、書き込み欄の下にある投稿の削除申請画面まで下げた。
そしてそのコーナーから、自分の投稿ナンバーと削除キーを使って書き込みを削除させる手順を踏むために、間違いのないよう十分に注意しながら削除キーを打ち込んだ。
キーの打ち込みに、両手の人差し指しか使わない変則的なタイピングであったが、打ち慣れた素早い動作であった。

男は打ち込みが終わると、大急ぎで削除ボタンを押した。
メールアドレスの書き込みが掲示板に表示されたのを確かめてから、そこまで十数秒の時間しか経っていなかった。
削除手続きが、それまで通りに反映されるものとすれば、考え抜いた言葉とメールアドレスが、ほぼ十五分後にその掲示板から削除されるのだ。
そのメールアドレスがその掲示板から読み取れるのは、その十五分余りという時間だけのことである。

突然男の手元の携帯電話が鳴り、液晶画面が、「センターにメールあり」という文字と絵の表示された画面に変わった。
男はメール機能を直接受信にはしていなかったのだ。
男は携帯電話に手を伸ばして軽くボタンに触れた。その指先で触れるボタンは、どのボタンで

も良いはずであった。

携帯電話の液晶画面が元に戻ったその瞬間、また携帯電話が鳴り、画面が「センターにメールあり」の表示に変わった。

三、四分ほどの間に、それを五十回繰り返したことになるのを、左手でボタンに触れながら右手でノートにメモして置いた「正」の字の数で知った。

もうそれ以上の数のメールがセンターに受け付けられることはなかった。

携帯電話のメール機能を選択受信に設定した場合、五十件以上のメールをセンターでは受け付けないことを、男は予め知っていたのだ。

選択受信に設定していなければ、電源をオフにしてキャリアのメールセンターに最大四百件保存されるものを後で受信する方法があった。あるいは電源をオンにしたままで、無制限に直接受信されることを選ぶ方法もあったのだ。

男にとって、そこまでの数の着信を必要としていなかった。

男が探し求めるものは「たったひとつの真正のもの」で良かったのだ。同行者を何処かのソーシャルネットワークサービスから探すことも考えた。

しかし、そこには紹介者が必要であった。招待状を配布しているサイトもあるのを知っていたが、社交性の乏しい男には気後れの方が強かったのだ。

出会い系サイトなら、そこに居るのは男の探し求める共感者ではなかったに違いなかった。

淋しい淋しいと両手を広げて身を擦り付けて来るように、狂おしいほどの思いで他人を待っているような、あまりに無防備で安直で短絡的な手段しか思いつかない相手を、男が探し求めているわけではなかった。

しかもそこには質の悪い傍観者がいることを常に意識する必要があった。

世の中の全てが善意に包まれているわけではないことを、男は深く知っていた。

タイムラグを持つ、この掲示板の貸し出しサービスの存在を知ることが出来たのは、男にとって限りない幸運であった。

このサイトを訪れることしか思い浮かばなかったような、ソーシャルネットワークサービスや出会い系サイトには性格が消極的過ぎ、気後れしてとても参加できないような、むしろ臆病なほど用心深い共感者が、たったひとりでも居てくれれば良かったのだ。

淋しい淋しいと両手を広げて身を投げ出すようにして、狂おしいほどの思いで他人を待っているような思いは同じであっても、今にも崩れ落ちそうな繊細さと淡く透明感のある、少しばかりの思慮深さと不器用さを男は求めたのだった。

男は詩人を志す夢想家でもあったのだ。

そして、自殺について迷い続けていた者でなければ、表紙を経て、その掲示板に辿り着くこともなかったに違いなかった。

「現代詩」から掲示板に至った者ならば、その掲示板を冷やかすように閲覧していても、男の「用意して置いた言葉」に敏感に反応することもなかつただろう、男はそう思った。

男が携帯電話のボタンに一回ごと触れて画面を戻していたのは、自分の書き込んだメールアドレスに対してどれほどの反応があるのか、不安と期待の入り交じった気持があったのだ。

男はそのメールが五十件に到るまで、僅か三、四分であることに驚いていた。その量と時間を

全く予想してはいなかった。

男が漠然と考えていたことは受信するいくつかのメールの中から選別をすることによって、たった一人の共感者を見出せば良いということだけだった。

男は携帯電話を取り上げて選択受信画面を呼び出し、そのヘッダーとタイトルを見ながら、ほんの少しの迷いを見せた後、全てをダウンロードさせた。

メールを選択受信に設定していたのは、悪戯メールが送信されて来るのを予測していたからだった。しかし、ヘッダーとタイトルの中にそれを感じさせるものはなかった。受信バイト数を五百バイトに設定していたこともあって、アスキーアートもどきの大容量のメールも、全く見受けられなかった。

大容量メールであれば、五百バイト毎に分割受信される仕組みであったから、同じヘッダーとタイトルが連続して並ぶはずであった。

そうか、男は呟いた。

五百バイトは全角二百五十文字なのだ、掲示板の制限は携帯電話のメールの何かの機能制限だったのだ、そう呟いた。

あの掲示板にはまだ何かの機能があったのだ、男はそう思った。しかし、最早そんなことはどうでも良いことであった。

全てのダウンロードが済んだのを確かめてから、携帯電話のメールアドレス変更画面を呼び出し、前もって考えて置いたメールアドレスへと、素早く変更させた。

それ以後の、そのメールアドレスへの送受信は不能となり、受信ボックスもメールアドレスの変更と同時に抹消されたはずであった。

掲示板に書き込んだメールアドレスは、他人の目に晒されてから僅か四分足らずでその役目を終わったのだった。

男に残っている仕事は、今は無用となったメールアドレスの投稿が、その掲示板から間違いなく削除されるのを確認することであった。

男はその短い時間の間に、何度もシミュレーションしていたことが滞りなく終わったかどうか口の中で反復唱和しながら、確かめていた。

掲示板から男の投稿が削除されたのが、「この投稿は投稿者により削除されました」との表示で分かった。

そうしなくても掲示板の表示数を少なく設定していたことから、自然消滅するはずだった。しかし「過去ログは保存していません」の文言が易々と信じられはしなかったのだ。

終わった……

男は呟いた。

長ったらしい、回りくどかった何ヶ月かがようやく終わったのだ、男はそう思った。

男はダウンロードさせたメールをゆっくりと読み始め、五十件の中から、どれを削除させ、どれを選ぶかを考えた。

男の書き込んだ携帯電話のメールアドレスに合わせたのか、携帯電話のメールアドレスが半数を占めていた。

男は、パソコン用のメールアドレスからフリーメールアドレスと思しきものを、本文も見ずに削除させた。次にバイト数を見ただけで、長い文章と思われるメールを削除した。

さらに添付ファイルを含むメールを削除した。残ったパソコン用のメールは五個であった。

男にとっては、まだ多過ぎる数だった。

本文をプレビューさせ、くどいと思われるメールを削除すると、残ったのは「方法は？」とだけ書き込まれたメール一件だけとなった。

充分だ……

男はそう思った。

次に、携帯電話からのメールを開き、絵文字を使ったメールを全て削除した。残った中から饒舌と感じられるような文章を送信したものを削除した。十一個残った。

合わせて十二個をアドレス帳に登録し、本文を再度ゆっくりと読み返した

ほとんどが、その手段を尋ねるだけの短い文章だった。

その短さが、何処かで固唾を呑んで男の返信を待ち侘びている者の気配を、男に感じさせたのだった。

男はその気配を体全身で受け止め、緊張感から自分の身体が震えているのを感じていた。

練炭、レンタカー

当方アドレスを

変えました

至急メールアドレスを

変更し

空メールを

願います

新規アドレスの方のみ

連絡します

男は、それを一斉送信した。

携帯電話のメールアドレスの偽装が可能かどうか知らなかったが、一応の用心と篩い分けのつもりであった。

それから間もなく、男の新しいメールアドレスに八個の返信があった。

四個という数が落ちこぼれたのだ、そう思った。

返信されて来た全てが、携帯電話のキャリアの発行するメールアドレスとなっていた。

それらは全て見知らぬアドレスであったが、男の新規アドレスに送信して来た以上、十二個の中の八個のアドレスの持ち主であるに違いなかった。

男の示す意図が、はっきりと相手側に通じているのだ。

八人という同行者の数が、多過ぎるような気もしたが、まだまだ篩い落とされて行くだろうと、男は思った。

せめて一人は残って欲しいと男は祈るように願った。

男は間髪を入れず、自分のメールアドレスを再度変更した。

そして、再度その全員に対してメールを一斉発信した。

再度アドレスを
変更しました

もう一度変更の上
返信願います

全ては
終わりのために

その回りくどさは、真剣な思いであることを訴え掛ける行為だと、相手方に分かって貰いたかったのだ。

しかも両者にとって、アドレスがいても簡単に変更出来るということは、メール交換している相手が数少ないか、居ないということを証明していることにもなる、男はそう思った。

途中で篩い落とされた誰かが男のメールアドレスを何処かに曝しても、そのメールアドレスは既に存在していないのだ。

残った八人も、再度のメールアドレス変更の依頼で何人か抜け落ちるかも知れなかった。

それでも続けるしかない、男はそう思った。

メールの着信音が響いた。

数分も待たずに、五件のメールが新しいアドレスで届いた。

必死に追い縋って来る五人の心情が、男には胸が締め付けられるほど分かるのだ。

それまでに落ちこぼれた者は違う意味で救われたのかも知れない、男はそうも思った。

男はすぐさまメールアドレスを変更し、その旨送信した。

再々度アドレス変更しました

これより一日一度連絡します

新規にメアド獲得し

返信願います

一週間以内

全ては終わりのために

倫之は身辺整理にすぐさま取り掛かった。アルバイト先のコンビニエンスストアの店長に連絡を入れると、引き止められることもなく拍子抜けするほどあっさり承諾を得た。

倫之は自分の存在の軽さに思わず笑い出した。

さらに、不動産屋に連絡を入れ、引き払うことを告げた。

思いの外、そこでは引き留められたのだ。少しの遣り取りを繰り返した後、翌月末で契約解除ということになった。つまりは契約書の解約手続きに則っただけのことだった。

様々な請求書が郵送されて来ることを考え、住所変更届を郵便局に出す事を忘れなかった。

宛先は、祖母の家にした。

そこは祖母が住まなくなって五年ほどになっていたが、郵便物はきちんと届くのだ。

万が一にも生き永らえて、何処かをおろおろと放浪し続けねばならなくなったときのことを考えたのだった。

それらの考えはこの何ヶ月か繰り返したシミュレーションの成果なのだ。

次は部屋の片付けだった。

契約は来月末までとなっている上、あと何日かはこの部屋に帰ってくるつもりでいることから、寝袋と着替えの入ったボストンバッグを残して、借りて来たレンタカーの軽バンに余分な部屋の荷物を積み込んだ。軽バンのキャビンはたっぷりのスペースを残していた。

倫之は田舎町にある祖母の家に向かって軽バンを走らせた。

父親が死んだのは、三歳を過ぎた頃だった。今ではその顔さえ、はっきりと思い出せなかった。写真館で、はしゃいでいる幼児に微笑みかけている大きな影の記憶しかないのだった。

祖母の家の仏壇に飾られている父親の写真は笑っていても、何処か余所余所しく感じてしまうものだった。その自分の感覚が何処から来るものか、よく分かってはいなかった。

倫之の遠い記憶の中で、彼の手を引いて歩く祖母と母親の記憶が、妙に交差し錯綜してしまうことがある。

あれはいつの日のことだったろうか、倫之は思った。

微かな記憶の中で、母親と寝ている枕元に、祖母が立っていたことがあったのだ。祖母が一言強い口調で何かを言い、突然倫之を抱き上げ、そのまま夜の街を駆け出したのだ。幼児だった倫之は、走る祖母の胸に抱かれて揺れながら、夜の空を見た。

煌々と照り映える満月が空にあった。遅れて母親が後を追いかけて来るのが、目に映った。

祖母はタクシーに飛び乗り、そのタクシーが動き始めてようやく、強く抱きしめていた手を緩めた。タクシーの後ろに追いかけて来た母親の立ち尽くす姿が残されていたことを、倫之は今で

も覚えている。

祖母の家で暮らしているときのことだった。

夜更けに窓が開いて、母親が一人で寝ていた倫之を小声で呼びつけた。

眠い目を擦りながら窓辺に立つと、母親が外から倫之を抱き上げるなり走り始め、近くに待たせていた車に飛び乗り、ドアを閉め、運転席に乗っていた誰かを促して急発進させた。

そのとき、祖母が家から裸足で飛び出し、追いかけて来た。見たこともないような形相で必死に追って来るのだった。

母親に抱きしめられながら、倫之は必死に走って来る祖母の姿を、見えなくなるまで目で追いつけていた。

倫之は何度も繰り返された不思議な光景を、唐突に思い出していた。

どの時期であったか、祖母の家で三人と一緒に暮らしていたこともあった。

深夜に車の停まる音がし、ドアが一度開閉されて発進した。その音で幼児だった倫之は目を覚ますのだった。間もなく、倫之の眠る部屋の窓が、祖母に聞こえないように小さく叩かれ、母親の呼ぶ声が聞こえるのだ。

少し成長していた倫之が窓を開けると、母親が窓から部屋に上がり込み、酒臭い息で布団に転がり込むように潜り込んできて、倫之を抱きしめながら、すぐに眠りこけるのだった。

隣の部屋で、祖母が目覚ましていることは分かっていた。しかし祖母が起き上がって来ることは、何故だか、なかった。

祖母が何を考えていたのか、子供だった倫之に分かるはずもなかった。

その翌朝、まだ眠りこけている母親をそのままに倫之が起き上がって行くと、その朝の食卓は、きちんと三人分の用意がされているのだ。

倫之と祖母が朝食を摂っていると、やがて母親がのろのろと起き上がって来るのが常だった。

母親は食事をしている二人を見下ろすと、自分の膳が揃っているのを確かめるでもなく、そこにあるのが当然のように座り込んで食べ始めるのだった。

食事の間中、二人は一言も口を利こうともせず、まるで前夜から、何も起こらなかったかのように、黙々と箸を進め続けるのだった。

祖母も母親も、幼子の前で言い争うことだけは、何かの約束事でもあったのか絶対にしなかった。何かの騒ぎの中で、幼子だった倫之が二人に近づくと、取り繕うように黙り込むのだ。

倫之が中学生になった頃、ほんの少しだけ分かった事がある。

たまに帰って来る母親は、相変わらず倫之の部屋の窓から突然入って来るのだった。

小さい頃から祖母は、倫之の寝入り端には添い寝をしても、必ず玄関脇の自分の寝間で休んでいた。

奥の広い部屋で、子供だった倫之は一人になってしまうのだ。そこへ母親が時々忍び込むように帰って来るのだった。

倫之が中学生になった頃、母親は自分の車で帰って来るようになった。夜更けて窓から帰って

来るスタイルは、倫之の小さい頃のままだった。帰って来るなり倫之を抱きしめ頬ずりするのだ。

倫之が照れて母親を押しやると余計に柔らかな身体を押し付けて来て、倫之が甘えるのではなく母親が甘えるのだった。

母親は甘え上手だったのかも知れなかった。家にいるとき、何が可笑しいのか、祖母と笑い転げていることもあったのだ。

そのとき、思ったのだ。

母親が思い立ったとき何時で帰れるように、祖母は寝入った孫の布団から出て行っていたのだと。孫を一度も叱ったことのない優しい祖母だった。

ある日のことだった。珍しく家に居た母親に言い付かって、車のトランクを開けたことがあった。靴箱と何個かのプラスチックケースがあり、母親の下着と洋服がきちんと仕分けられて入っていた。ひとつは洗濯物が無造作に放り込んであった。母親は、街の何処かに住んでいるというのではなかったのだ。

子供であっても、それぐらいは分かった。

どういう生活をしているのか想像も出来なかった。

いつの間にか横に立った祖母がトランクを閉め、倫之は背を押されるようにして家に入った。

祖母は母親のことを、何も教えて呉れはしなかった。

倫之も何も聞かなかった。

祖母の家は慎ましやかであったが、倫之が貧乏を意識したことはなかった。倫之が物をねだることは殆どなかったが、その町で買えるものは何でも買ってくれた。母親もまた物珍しい玩具やゲームなどを買って来ていたから、何一つ不自由はしなかったのだ。倫之は自分の家が少し風変わりであると意識していた。

田舎町の学校ではあったが、成績も運動能力も一番良かったから、風変わりであっても苛められるようなことはなかった。ただ家に帰ると、本とゲームに夢中で遊びに出ることはなかった。欲しいと思ったことさえなかったが、欠点といえば、遊び友達という者がなく協調性もなかったというぐらいだった。

そして中学三年になったときのことだった。

母親が帰って来る途中で事故にあったとの連絡を受けて、祖母と救急病院に駆けつけた。

病室に入るのと同時に、母親が息を引き取ったのだ。母親の目尻から一筋の涙が流れたのを倫之は見つけ、茫然とそれを見つめ続けていた。

祖母と二人、立ち尽くす以外に何も知らなかった。

祖母は母親を家に連れ帰ろうとはせず、そのまま街で誰も来ない葬式を執り行った。

それから何日か経って、仏壇の前に座った祖母に呼ばれ、畏まって座らされた。

「あの娘は死んで良かったんだよ。そうとでも思ってやらなくては、ねえ。死んで、ようやくお前の役に立ったと言うのかも知れないね」

そう静かに話し始めた。

「来年の高校進学を何処にするかを、自分で決めなさい。あの娘のささやかな保険金をお前がどう使うかも、決めなさい」

そう、言ったのだった。

「お祖母ちゃんではどうしようもなく考えていたものを、あの娘が最後の最後に、お前の役に立ったんだよ。倫行の学力なら何処へでも行けるはずだよ。街では下宿することになるだろうから、高校が決まったら、お祖母ちゃんがきちんとした下宿先だけは、探してあげるよ」

「お祖母ちゃんはどうするの」

倫行が聞いた。

「ついて行きたいけど、お祖母ちゃんはこの田舎で静かに暮らすつもりだよ。ここなら畑一枚あれば、貧乏でも何とか生活出来るだろうからね」

微笑みながら、倫行の顔を見つめ続けるのだった。

「一緒に行こうよ」

倫行がそう言った。

「倫行は大学にも行かなくてはならないんだよ。そうしたら東京か何処かの都会に、出て行くことになるだろうよ。倫行がそのとき思いのままに生きて行けるように、邪魔にならないように、ここに住んでいるよ」

祖母は、そう言い張った。

「通える高校にするよ」

倫行はそう言った。

「駄目だよ。倫行はこんな田舎で燻ってはいけない人間なんだよ。自分の遣りたいことを好きなように遣って、生きたいように生きて行きなさい」

祖母はそう言ったのだ。

倫行は県庁所在地の高校に進学し、下宿生活を始めた。

月に一度、倫行はバスで田舎町に帰っていた。祖母は下宿した最初に一回来ただけで、街に来ようとはしなかったのだ。

「勉強は進んでるかい」

それが祖母の口癖だった。

通知表を見せると、まず仏壇に飾り、線香を上げ、短い経を声に出して読むのだった。倫行もそれに倣い、手を合わせた。

母親の笑っている写真の横には、父親の何処か余所余所しげな写真が並んでいた。

「父さんは何をしていたの」

初めてそのことを質問した。

祖母はしばらく黙っていた。

「高校の先生だったんだよ。ところが何処かで道に迷ってしまったんだろうねえ、教え子の女生徒と心中したんだよ」

倫行は驚いて祖母を見遣るばかりであった。

「そのことを誰か他人から聞かされるよりも先に、はっきり教えて置こうと思ったんだよ。あの子は子供の頃から頭の良い、優しい子だったよねえ。畑仕事に出る後ろに、いつもくっ付いて離れようとしないう子供で、倫行とまるで同じだった」

祖母はそう言って笑った。

倫行に返す言葉はなかった。

「嫁にとっては、辛かったことだろうね。それを忘れることは難しかったのだろうよ。気分の波の激しい嫁が、倫行とどうかなるんじゃないかと思うと心配で、何度も出て行った嫁から倫行を取り戻しに、街まで行ったことがあるよ」

祖母が話し続けた。

「あの娘も最後にはお前を連れ出すことを諦めたんだよ。倫行を育てられない生活をしていることは、自分が一番よく分かっていただろうからね。お祖母ちゃんは息子の不始末を詫びるつもりで、家への出入りを許していたんだよ。それに幼子に母親は必要だろうからねえ」

倫行はよく分からないまま頷いた。

「こんな話聞くの、嫌だったろうね。ごめんよ、でも今の内に話して置こうと思ってね」

祖母がそう言った。

祖母がそう言ったのは間違いではなかった。しばらく経ったある日のことだった。

祖母が脳梗塞で倒れたと、下宿先に連絡があった。

慌てて倫行が駆けつけた病院は、母親が運び込まれていたのと同じ救急病院だった。祖母は三日間眠り続けた。

目が覚めた祖母は、右半身が利かなくなっていた。そのとき祖母は左手で必死に自分の腹を探ろうとしているのだった。

倫行が見つめている横で、年配の看護婦が祖母の耳元に口を寄せて、大きな声でゆっくりと話した。

「お祖母ちゃんの大事な胴巻はここにあるからね、大丈夫だから、安心して治そうね」

そう言って据付のキャビネットを開け、胴巻を取り出した。

祖母はそれに手を伸ばした。

そして、それを倫行の手に押し付けるのだった。

「おおういおう」

祖母が小さな声を上げた。

「お祖母ちゃん、どうしたの」

看護婦が耳元で言った。

倫行には、祖母が倫行の名を呼んだことが分かっていた。祖母の差し出す胴巻を、受け取って頷いた。

祖母はそれで安心したというのか、涙を流した顔で笑おうとした。その顔が歪んで見え、倫行は一瞬たじろいだ。

祖母はそれを敏感に感じ取ったのか、動きのままならぬ自分を呪ったのか、不思議な声を上げて泣き始めた。

「どうしたの、お祖母ちゃん、頑張って早く治そうね」

看護婦がそう言って、祖母を慰めた。

倫行は何も言えず、祖母の大事な胴巻を握り締めていた。逃げ出したいほど、怖かった。

倫行が胴巻を枕元に戻そうとすると、祖母が声にならない声を大きく上げ、怒ったような歪な表情をして腕を動かそうとするのだった。

「預かって欲しい、そう言っているみたいね」

看護婦がそう言った。

「大丈夫よ、お祖母ちゃん。大事なものは、お孫さんに預かってもらうから、安心してね」

そう言って祖母を落ち着かせようとするのだった。

倫行はその傍で身を硬くしていることしか出来なかった。

疲れたのか再び眠った祖母の横で、倫行は胴巻を開けた。

倫行名義の農協の預金通帳が、二冊出て来た。思いの外、大きな金額が書き込まれていた。月末には倫行の下宿代と小遣いが引き出され、また少額の入金が為されていた。祖母名義の郵便貯金には残金が殆どなかった。

そこに毎月少額の振込みが町の寺の、PTA会長でもあった住職の名で為されていた。

その意味するものが、倫行には分からなかった。

その金額は倫行の小遣いとして祖母が送る額より少なく、慎ましやかな祖母は、毎月使い残した金額を倫行の農協の口座に振り込んでいるのだった。

倫行もまた、祖母の慎ましやかな生活を知っていたから、小遣いとして振り込まれた金額を使い切ることなく、銀行口座に残していた。

住職が祖母に金を振り込む理由が分からなかったが、祖母の口から聞けそうもなかった。

薄く目を開けた祖母に、自分の腹に巻いた胴巻を見せた。

祖母はゆっくりと頷いた。

病状の落ち着いた祖母は、民生委員の世話で介護老人保健施設に移り、リハビリテーションに励むことになった。気位の高い祖母は、不自由な言葉を憚り、あまり話そうとはしなかったが、左手を使った筆談で意思を周囲に伝えていた。

倫行の顔を見ると、「おおういおう」そう小さく呟くのだった。

トモユキよう……

そう言っているのだった。

「お祖母ちゃん、頑張ってるね」

それだけしか倫行には言えなかった。

祖母はリハビリを自ら進んで行っていた。他人に排尿便の始末をされることが、嫌のようだった。

介護士から止められても、歩行器を使って自分ひとりで夜中のトイレに行こうとするのだ。掴まり立ちして歩行器まで行かないように、夜はベッドを離していると、担当の介護士が倫行に話したことがあった。

そんなある日、ひとりでトイレに行こうとして転んだ祖母は、再度の脳梗塞を起こした。

倫行が駆けつけると、病院に移されていた祖母は、鼻からチューブを入れ、酸素マスクを付けていた。開いている薄目に意識があるのかないのか、倫行には分からなかった。

「ダイコクサン、そんなに頑張らなくても良かったのにね」

一度顔を合わせたことのある民生委員が、倫行に言った。

その家の商売に結びつく屋号で呼ばれることの多かった地方だった。祖母はダイコクサンと呼ばれていた。それが何であるのか倫行は知らなかった。

その言葉が気になった倫行は辞書で調べ、それが寺の住職の妻を意味するものであると、そのとき初めて知ったのだ。

何かが倫行の中で閃いた。

祖母の口座に毎月少額を振り込んでいた住職の名と、その朧気な意味が分かって来たのだ。

鎌倉時代から続く寺の住職には、親子ほども年の違う妻と、その間の子があった。その子が倫行の同級生であった。小学校と中学校と移っても、住職はPTA会長として留まっていたから、名を覚えていたのだ。

世間を知らない倫行はそこまでのことしか分からなかった。

「お祖母ちゃん、来たよ」倫行はそう言って、祖母の手を握り締めた。その手に少し力が加えられたのが、分かった。それが祖母の意識であるのか、刺激に対する筋肉の反応でしかないのか、分からなかった。

倒れて五年の内、四年間がこのままの症状の祖母だった。

使わないよう心掛けたけれども、あと五年分しか残せなかったよ、ごめんね……

倫行は口の中で呟いた。

祖母が老健と病院を行き来しているのは、理事長の好意であった。特別養護老人ホームが祖母を引き取る当てさえなかったのだ。

倫行は自分の口座に残っていた金額から、これからの予定される費用を除いて、携帯電話を使って、祖母の口座に振り込んだ。

老健へ支払う費用は祖母の口座から自動引き落としになっていたから、倫行が介在しなくても、あと五年は大丈夫であるはずだった。

祖母の寿命を金額で計ることしか出来ないことや、ふと五年以内にどうか死んで欲しいと願う卑しい心があることに、鳥肌が立つほど嫌味な自分があるのを自覚してしまうのだった。もし貯金が尽きたなら、そういうことを考えもしなかった。

「もう行くからね」

そう言って病室を出ようとしたとき、祖母が何か言ったような気がして振り返った。

こちらを見ているようにも取れる瞳に、一瞬、力が込められたような気がした。

倫之は、その瞳の光が変化するかもしれない、そう思いながら暫くの間、遣り切れない思いで、見つめていた。

おおういおう……

そう言ったような気がした。

そう思っただけであったかも知れない。

倫行は踵を返し、そこを離れた。

祖母の家に荷物を運び込み、黴臭い部屋で、仏壇を開けた。

母親と父親の写真を交互に見ながら、携帯電話に取り込んだ自分の幼児の頃の写真を思い浮かべた。その頃はまだ家族であったのだと。

倫行は突然携帯電話に手を遣った。三十八人と四人と三人、その篩い落とされた数を、見縊っているかも知れない自分の迂闊さに気が付いたのだ。

その内の誰かが、警察に通報した可能性があることを忘れていたのだ。彼らがアドレスを辿ることは不可能であるが、司直は別なのだ。

投稿から、九時間を過ぎていた。キャリアの会社が営業を始めて三時間は経っているのだ。メールアドレスからナンバーを割り出してかも知れなかった。

頻繁にアドレスを変更していたが、通信ログから相手方を割り出してはいまいか、そう考えるだけで身体が震えだした。

いや、そこまではまだ進んではいないだろう……

楽観的なものの考え方は禁物であった。

倫行は、五人に向かってメールを発信して、すぐに携帯電話の電源を切った。

決行間近

明朝

東京駅に

集合

詳細は早暁

当方メアド変更の可能性あり

返信不要

キーワード

全ては終わりのために

倫行はすぐに家を出て、一番近いターミナル駅に向かった。レンタカーをそこにあった営業所に返し、電車で飛び乗った。

もう引き返しはないのだ、そう決心したのだった。

作り上げたホームページの利用価値を、投稿者と閲覧者が引き継ぐのだ。そのための雛形として自分が存在している、倫行はそう思っていたのだ。

まだ少しの資金がある内に、決行する必要があるのだ。

倫行はこれからの連絡をどうするか、車中で考えていた。

倫行の携帯電話は、POP3対応のメーラーを持つ端末であったが、Eメールを使うのは避けていた。メールアドレスの度々の変更に向きような気がしたからであった。携帯電話なら、一日三度までなら、ほぼ瞬時に変更可能だったのだ。しかし、そのアドレスを度々変更しても、まだ安全に通用するのか、既に通信記録を探られているのかを、知る術がなかった。

新幹線に乗り換えてからも、倫行は考え続けていた。

何処かに何かの見落としをしていないか、考え続けていた。

キャリアのメールサーバーの通信記録とはどんなモノであるのか、想像も出来ないのだ。

さらに同調者にどう接触すれば良いのか、分からなかった。

東京駅に着いてもまだ考えが決まらなかった。全ては明日なのだ、倫行は焦っていた。

いつの間にか倫行は夜の山手線を一周していた。そのとき、気が付いた。若者だけでなく大半の乗降客が車内や構内で、携帯を片手にメールか何かの操作をしているのだ。

何かが閃いた。

倫行はビジネスホテルで、ぐっすりと眠ってしまった。

目が覚めると、窓の外が白んでいた。

おはようございます

お目覚めですか

今どちらにいらっしゃいますか

ご連絡ください

全ては終わりのために

それを全員に送信した。

やがて携帯にメールの着信があり、全員が東京駅近辺にいることが分かった。何処から来たのか分からないが、その落ちこぼれが一人としてなかったことに驚ろくしかなかった。

倫行はそのひとりずつに、新規に取得したアドレスで、それぞれ違う言葉を送信した。

山手線内回り

最前部車両の位置で

7時10分にお待ちください

全ては終わりのために

京浜東北線大宮方面

最前部車両の位置で

7時15分にお待ちください

全ては終わりのために

山手線外回り

最後尾車両の位置で

7時20分にお待ちください

全ては終わりのために

京浜東北線磯子方面

最後尾車両の位置で

7時25分にお待ちください

全ては終わりのために

中央線最前部車両位置で
お待ちください
7時30分
全ては終わりのために

倫行は誰かの通報があった可能性を、考え続けていたのだ。

携帯電話のアドレスをこれ以上使おうとは思わなかった。万が一のことを考え、少しでも時間稼ぎが出来ると思われる方法を選んだ。

時間より早めにホームに着くように計算をしていた倫行は、売店でスポーツ新聞とパンを買い、近くのベンチに座った。

ラッシュの時間前であってもやはり東京は人が多かった。その中で、そこかしこに携帯電話を操作している者がいるのだ。倫行が携帯を操作していても違和感はない筈であった。

7時を過ぎた頃、何人かが神田寄り立って携帯を操作していた。倫行はそのとき、自分がどれほど間抜けていたかを知った。男女の別も含めてプロフィールを聞くのをまるっきり、忘れていたのだ。話が煮詰まらない内にプロフィールを交わして予断を持たれることを恐れたことが、原因だった。

倫行は、一人ずつに用意していた下書きをいつでも送信出来るように、画面を切り替えていた。

そのとき突然、ここは東京なのだ、そう思い至った。自分は小賢しい田舎者なのだ、そう思ったが引き返せはしなかった。

時間前だったが、構内アナウンスに合わせて、次のメールを発信した。

何人かの男女のうち、携帯を耳に当てて音声通話をしようとしている者を除くと、三人が残った。男一人、女二人だった。

服装もばらばらで、怪しむべき姿ではなかった。

一人の女が画面に見入っていた。

次の電車に乗って下さい
マナーモードにすることを
忘れずに
全ては終わりのために

その女性があたりを見渡すようにしながら、入ってくる車両に近づいた。服装からして通勤途中の女性には見えなかった。

あれがそうかも知れない、倫行はそう思った。乗客が入り口に集まり始めたが、同調したような動きは見られなかった。

倫行は間の抜けた顔を装い、ぼんやりと周りを見ていた。

およそ五分後、同じように京浜東北線に一人を案内したが、今度は候補者が男女五人ほど居て、皆目分からなかった。その何人かが連れ立っていると、見張っているとかの印象はなかった。もっとも若造の浅知恵ぐらい、そこに捜査員がもし居るならば簡単に見破り、倫行に気付いたに違いなかった。

倫行はホームを間違えた田舎者の振りをして五番線に移ったが、振りをしなくても田舎者にしか見えなかったに違いない。

倫行は自分の小賢しい知恵を恥じた。

売店の傍に立ち、次に用意しているメールの下書きを少し書き換えた。

そしてそれを発信した。

申し訳ありませんが
至急三番線に移り
山手線内周りに乗車して下さい
マナーモードをお忘れなく

全ては終わりのために

そう送信した。

通勤者には思えぬ若い女性が携帯の画面を見て、慌てて階段を降りて行った。その女性が該当

するとして、もう一人の見当がつかなかった

しかし先ほどよりは名案であったかも知れなかった。

残りは一人、中央線ホームに来る筈だった。

またホームを移ることの不自然さに気が付いた。ごった返し始めた駅のホームでは、動く者より動かずに立ち尽くしている者の方が、不自然で目立つのだった。どうやって見分ければ良いのか、途方に暮れるほどだった。よく考えたつもりでも、大した考えではなかったのだ。

次のメールを送信した。

申し訳ありません

五番線の山手外回りに

入って来る次の電車に

マナーモードにして

お乗りください

全ては終わりにために

中央線のホームから駆け下りた男性が、五番線に駆け上がって来たのが分かった。倫行より少し年上のように思えた。

倫行は少し考え、それが該当者なら、考え直さなければならぬと思った。倫行のリードで決行する必要があったのだ。

その男性の真剣さと自分の残酷さに、胸が苦しくなった。

倫行は新規メールアドレスをすぐに申し込み、さっき使ったアドレスを解約した。

先発したであろう四人にその新しいアドレスで、簡単な目印とニックネームを求めると同時に、上野公園口を十分置きに指定したのだった。そこには一度だけ行った事があった。

倫行はレンタカーを上野駅の近所で借り、公園口の駐車場に入れ、送られて来たプロフィールを一人ずつ読んでいた。

待ち合わせた時間になった。倫行は遠回りをするようにゆっくりと近付きながら、教えられた服装に見合う相手を探した。

「ヒロミちゃん？」

そう声を掛けた相手が怪訝な顔をした。

間違えたのだ、倫行は焦ってしまった。取り繕う言葉も思い付かなかった。

「わたしです」

横から似ても似つかない女の子がそう言った。健康的過ぎるほど健康的な女の子だったのだ。

倫行は慌てて最初に声をかけた相手に謝り、健康的な女の子を駐車場の方に導びき、歩き始めた。

倫行の風体が他人に不審がられるようなことはないはずだった。おっとりとした、人懐っこい顔と言われていたのだ。

その女の子は、緊張感からなのか、歩きながら先に行く倫行に向かって、絶え間なく話し続けるのだった。誰かに聞かれるのではないかと、倫行は冷や汗をかいていた。

その子をレンタカーのワゴンに乗せると、倫行はもう一度待ち合わせ場所に戻った。

今度は「ナオミ」さんの番だった。痩せた黒服とだけ教えられていた。見付からなかった。倫行がどうしたものかと考えていると、後ろからいきなり肩を叩かれたのだ。倫行はのけぞるようにして、振り返った。

「ナオミです」

中年の女性が倫行に挨拶した。

倫行が戸惑っていると、その女性は笑った。

「東京駅の向かいのホームに居た挙動不審の若い男の子が、熱心に携帯を見つめて何度も送信している様子だったから、何となく目星をつけてたの」

顔色が変わったのが自分でも分かった。見当をつけていた女性とはまるで違っていった。

「さあ、行きましょう」

なおみさんが軽快に言った。

倫行とナオミさんが歩き始めたとき、また声を掛けられた。

「わたし、ユリです」

誰もが振り返るような美人だった。

「トモユキです」

釣られて本名を名乗った。彼女もまた十分後に待ち合わせている名前だったのだ。

倫行は慌てて、周囲を見回して様子を窺った。不安に駆られたのだ。探す相手から見付けられるようでは、どうしようもないではないか。

「落ち着きましょうよ」

ナオミさんが面白そうに倫行を見つめた。どうしてそんなに落ち着いていられるのか、倫行には分からなかった。

「どうして分かったんですか」

倫行は、ユリさんに聞いた。

「だってかなり挙動不審でしたよ。きょろきょろ人を探している様子が分かりましたもの」

眩しいほど綺麗なユリさんがそう言って、やはり笑った。

倫行はその場を急いで離れる必要があるような気がした。

倫行は足を速めた。

倫行の後ろで、二人が仲良く明るく挨拶を交わしていた。

倫行は混乱した頭の中で、もう一人を探すのを諦めた。そのことを彼女たちに言ってはならない、そう思った。

それは高いビルの屋上から縋る相手を突き落とすような、残酷な仕打ちであったに違いなかったが、致し方なかった。

地獄に落ちろ……

倫行は自分を呪った。

レンタカーに戻ってすぐ、名前だけの自己紹介をし合った。

「携帯の電源を切ってもらえますか」

倫行がそう言うと、健康少女が不満そうな声を上げた。

「どうしてえ。携帯のない生活なんて考えられないのにい」

「トモユキさんの言う通りにしましょう」

ナオミさんがそう言って、取り成してくれた。

「そのほうが良いかもしれませんね」

ユリさんがそう言った。

倫行は車を走らせながら、ルームミラーとバックミラーに注意していた。誰かが必死になって追いかけて来るような恐怖感が、背後にあったのだ。

それは東京駅まで来ながら、置いてけ堀を食らった二人の怨念かも知れなかった。

倫行は泣きたいような気持ちでハンドルを握っていた。

「わたしたち、これからどちらへ向かうのでしょうか」

ナオミさんが言った。

「まだ聞いてませんでしたね」

ユリさんが言った。

「わたし、海の見えるところがいいなあ」健康少女のヒロミちゃんが、言った。

「まず、高速に乗りましょう」

倫行が言った。

それに全員が頷いた。

何をしようとしているのか、三人とも分かっているのだろうか、倫行は不安になって来た。

「どちらに向かうのかしら」

助手席のナオミさんがのんびりとした声で、また言った。

「中央高速はどうでしょうか」

倫行が言った。

「あら、嫌だ。地元になるわ」

ナオミさんが答えた。

「わたし、東名は嫌よ」

「わたしは常磐道」ユリさんとヒロミちゃんが答えた。

こんな展開になるとは思ってもいなかった倫行は、言葉に詰まってしまった。

「そうなると、関越か東北のどちらかになりますね」

倫行がそう言うと、後ろからすぐに声がして来た。

「イメージじゃないなあ」ヒロミちゃんだった。倫行は車を走らせながら、途方に暮れた。

「レンタカーの契約は、どうなっているんですか」

ユリさんが尋ねて来た。

「万が一を考えて、三日間、長野方面。そう答えました」

「高かったでしょう」

ナオミさんが訊いて来た。

「ワゴン車ですから、八万円ちょっとですね」

「わあ、贅沢だなあ」

またヒロミちゃんだった。

倫行はどうしていいのか、分からなくなってきた。

「東北道を通って、そのまま北海道に渡りましょうよ」

ナオミさんがそう提案した。

「素敵ですね、それ賛成」

ユリさんが同調した。

「カニを食べたあい」

ヒロミちゃんが叫んだ。

「トモユキ君は、どう思う」

ナオミさんが尋ねた。

「いいわよね、トモユキ君」

ユリさんがそう言った。

「トモユキ君、そうしよう」

ヒロミちゃんまでが、クン付けで呼び、位付けが決まった。

最下位の倫行が考え込んでいると、ナオミさんが言った。

「お金なら、少々あるわよ」

ナオミさんが、そう言った。

「わたしも、少々あるわ」

ユリさんがそう言った。

「わたし、奢られちゃうわ」

ヒロミちゃんが付け加えた。

「そう言う問題じゃなくて…」

倫行が言いかけた。

「全ては終わりのために」

三人がそう言った。

「どのみち、全員の電源を切って置く必要はあるのよね」

ナオミさんがそう言った。

「レンタカーも、トモユキ君の名前じゃ危ないということよ」

「すみません」

倫行は謝るしかなかった。

「トモユキ君、家出人捜索願いを出される可能性は？」

「それだけはありません」

倫行が答えた。

「皆さんは？」

倫行が尋ねた。

「わたしは大丈夫だけど」

「わたしも大丈夫よ」

ナオミさんが答え、ユリさんが答えた。三人が揃ってヒロミちゃんを見た。

三人に見つめられたヒロミちゃんが慌てて首を振った。

「よく家出してるし、家族みんな慣れっこになってるから…」

ヒロミちゃんが答えた。

ナオミさんとユリさんが顔を見合わせて考えていた。

ヒロミちゃんは黙ってその二人を見つめていた。

「とりあえず、コーヒーでも飲みましょうよ」

ナオミさんがそう言い出し、ファミレスに全員で入った。

簡単なものを注文し、その場で話すこともなく、誰もが押し黙ったまま食事をしていた。

ヒロミちゃんがトイレに立ったときだった。

「あの子を置いて行くわよ」

ナオミさんがそう言って、素早く立ち上がった。残った二人がそれに続いた。

車に乗り込み、発進させて歩道に乗り出したとき、追いかけて来たヒロミちゃんが車の側面を激しく何度も叩いた。

泣きそうな顔をして、スライドドアの窓を激しく叩いた。

驚いた通行人が立ち止まって、ワゴンの方を見ていた。

ユリさんがすぐにドアを開けて、ヒロミちゃんを引き摺り込んだ。倫行は、ここで慌てては絶対にいけないとばかりに、ゆっくりと車道に乗り入れた。

ヒロミちゃんが泣き出した。

「ナオミさんも、ユリさんも、トモユキ君も、本当に酷いんだからあ。言いつけちゃうぞう」

そう大声で言って泣きじゃくるのだった。ユリさんがヒロミちゃんを抱きしめ、背中を撫でて慰めていた。

「これからしようとしていることが本当に分かっているの？」

ナオミさんが聞いた。

倫行も、その言葉で、全員に聞き質したかった。

「わたしも連れて行ってね」

ヒロミちゃんが皆に甘えるようにそう言った。

「仕方ない子ねえ」

根負けした格好のナオミさんが、まるで先生か母親のように優しく言った。

「絶対に、絶対だよ」

すこし機嫌の直ったヒロミちゃんが言った。

「それにしても、レンタカーを何とかしなくてはねえ」

ナオミさんが、そう呟くとユリさんが答えた。

「わたし名義なら、かなりの時間稼ぎが出来るかも知れない」

そう言ったのだ。

「どういうこと？」

ナオミさんが聞いた。

「わたしの使っている携帯、モト彼というか、ヒモだった男の何台目かの携帯だから、私に辿り着くまで、かなり時間がかかると思うの。いま指名手配されて逃亡中だし、何処かであくたばっているかも知れないし…」

ユリさんが唇を噛んだ。

「殺してやりたかったわ」

三人が身を固くして、ユリさんを見つめた。

「あら、そんな目で見ないでちょうだい。わたしにも、いろんな事情があるということよ」

ユリさんが明るく笑った。

「そうね、まずレンタカーを乗り換えましょう。とりあえず、トモユキ君、中央高速で八王子まで行きましょうか」

ナオミさんが言った。

「八王子でインターを降りて近くの営業所に、このワゴンを返しましょうか。わたしたちは先に降りて、ユリちゃんの名義で新しいワゴンを借りて置くわ。それから合流してコースを変えましょうよ」

倫行は、ナオミさんたちが本当に自分を拾い上げてくれるかどうか、不安だった。先ほど、ヒロミちゃんが必死に追い縋って来た心境が、痛いほど分かったのだ。それと同時に、今朝取り残して来た二人の心情を思うと遣り切れなかった。

どうか何かで救われて欲しいと、倫行は心から願った。

「お待ちどうさま」

営業所を出て、振り返り振り返り歩いていた倫行の横に停まった車が、その窓を開けた。ヒロミちゃんが声を掛けて来た。

「来ないかと思ってたでしょ」

ヒロミちゃんが笑っていた。運転席で、ユリさんが青白い顔で、額に汗を掻いたまま、ハンドルを強く握り締めていた。

運転席に乗り込んだ倫行に替わって、ユリさんが倒れこむように後部座席に移った。

「ああ怖かった、死ぬかと思った。もう死んでも運転しない」

ユリさんが震えて言った。

「これから死ぬっていうのに」

ヒロミちゃんが呆れたような声で笑った。

釣られて皆が笑い出した。

「さあ、どう行きますか」

倫行が尋ねた。主導権は全く持っていないのだ。

「トモユキ君、ここから東北道に回れるかしら」

ナオミさんが聞いてきた。

「カーナビが付いてますし、少しは調べて置きましたから」

そう言って車を走らせた。

東北道に乗るまでは、それほどの距離を稼げなかったが、高速に乗ってしまえば順調に走ることが出来た。

途中で何度かの休憩を挟んだが、ヒロミちゃんを置いて行こうと二度と思うこともなく、北へと向かった。

みんな楽しそうであった。

夜になると、みんな疲れたのか、段々と静かになって来た。

「わたし、エイズに罹っているの」

ユリさんが口火を切った。三人が静かになって、ユリさんの次の言葉を待った。

「高一のときだったわ。家が面白くなくて、繁華街をうろついていたとき、アイツに声を掛けられたの。カッコ良かったわ」

遠い目をしてそう言った。

「そう、勘違いしたのよね。単なるチンピラだった。でもわたしはアイツに夢中だった。ドラッグも覚えたわ。そのうちに、客を取るように、言われたの。アイツも好きだったし、ドラッグも欲しかったから、言いなりに客を取ったわ、お金を渡すとアイツ優しくしてくれるの」

ユリさんが話し続けた。

「アイツもジャンキーだったのよ。身体中の血が汚れて行くような気がしたわ。それでもアイツから離れられなかった。あるとき、高校の同級生と擦れ違ったの。その子は気付かなかったけど、わたしは思わず隠れてしまった。とても可愛かった。あの世界に戻りたいと思ったの」

「そう思ったら、我慢できないほど悲しかった。そのとき、前から不安だった病気のことを調べてもらいに、保健所へ行ったのよ。陽性だったわ。回し打ちしていた注射針からなのか、風俗での客からなのか、分からなかったけれど、もうあの子達のいる世界へは帰れないの。それだけが、理解出来たのね」

「それから狂ったようにセックスしたのよ。一日十人の客を取ったこともあるわ。この病気をうつしまくってやる、それだけを考えていたのね。汚れ切った世の中に復讐しているつもりだったのよ。ところがあるとき、何もかも詰まんなく思えたの。アイツが逃亡した後、飼ってた猫が目の前で車に轢かれたの」

「そのとき、わたしは立ち尽くしているだけで、何も出来なかったし、何もしなかった。いえ、何も感じない自分が、そこにいることだけ分かったの。しばらく見ていたけど、何の感傷もなかったわ。そこにあるものは、モノでしかなかった。その光景が、まるでテレビか映画の画面のなかの出来事のようにしか、思えなかったの。翌日そこを通りかかると、あの可愛がっていた猫が、ペしゃんこの皮だけになって、アスファルトにくっ付いてた」

「ポンと音がしてわたしの中から、何かが抜けて行ったのよ」

ユリさんが静かに言った。

みんなが静かに聴いていた。

「わたしの場合はね」

ナオミさんが話し始めた。

「この年だもの、人並みに恋愛もしたわ。でも縁がなかったのか、ときめくような恋でもなかったわ。何もかも平凡だった」

「付き合いが苦手だったから、どうしても社内の人を対象になってしまうし、引っ込み思案のまましていると、みんな去って行くの。その内に、させこさん、なんて言われていたのよ。知らなかったなあ、誰か教えてくれても良かったのにね。そうなるって酷いものね。上司から誘われるだけの女になってたの」

「わたしは恋愛のつもりだったけど、誰も本気じゃなかったのよ、当たり前だけどね。わたしも復讐のつもりで、会社の金を持ち出し、慣れないホスト遊びもしてみたわ。酔うまでの一時だけね、楽しいのは。持ち出して余ったお金を前にしても、何にも楽しくないの」

そう言ってバッグを開けた。

帯封をしたままの札束が溢れるほど入っていた。

「欲しかったら、好きなだけあげるわよ」

ナオミさんが気怠るそうに言ったが、中を一瞬見ただけで、誰も興味を持たなかった。

「本当は公務員なの。俗にプール金と言われているお金だから告発もされないのよ」

倫行はパーキングエリアの隅に車を停めた。静かに話し合うときかも知れなかった。

「トモユキ君て、いくつ？」

「二十三です」

ナオミさんに答えた。

「ゲッ、二個上じゃん」

ユリさんが笑いながら倫行を見た。倫行はユリさんの眩しさに目を伏せた。

倫行の番だと思い、家のことや祖母のことを話した。誰もが静かに聴いてくれた。

静かな夜だった。

「トモユキ君は、お寺のお孫さんに当たるの？」

ナオミさんが訊いた。

「分かりません、大学へでも行こうとしていたら、戸籍謄本を見る機会もあったかも知れませんが、何の興味もありません」

倫行が答えた。

倫行は喉の渴きを覚え、車を降りて自動販売機の方へ、ゆっくりと歩き始めた。

誰かが続いて降りて来て、後に従って歩いて来るのが、ドアの閉まる音に続いた足音から分かった。

背中にぶつかるように、柔らかな身体が身を寄せて来た。甘い香りと暖かな丸みが、腕に絡まって離れなかった。

倫行は、立ち止まった。しかし、その身体を抱きとめれば、自分が崩れ去ってしまうような気がしたのだった。身体が硬直したように、何も出来なかった。そのときに崩壊し兼ねない自分が怖かったのだ。

どれほどの時間が過ぎただろうか、倫行は走り去る足音とともに、腕に絡まっていた甘い香りと丸みを帯びた暖かさが消えていくのを、身じろぎもせずに寂しく感じていた。

四本の缶ジュースを持って車に乗り込むと、三人がカーナビをテレビに切り替えて、見入っていた。

ニュース番組だった。

茨城県で火事があり、失火もしくは放火で一家六人が焼死したというニュースだった。そして行方不明となっている長女の安否を警察と消防が探していると、キャスターが告げた。

ヒロミちゃんが後部座席で膝を抱え込み、顔を埋め込んで嗚咽を漏らしていた。

ナオミさんとユリさんと倫行は、顔を見合わせ、お互いの考えていることが共通であることを確信した。

ナオミさんが回り込むように後部座席に移り、ユリさんと二人でヒロミちゃんの肩を撫で、気を落ち着かせていた。

誰ともなく、溜息を付いた。

「わたしたち、みんな一緒よ」

ナオミさんがヒロミちゃんの耳元で囁くように言った。

ユリさんが頷いた。

ナオミさんは知性的でとても美しかった。ユリさんは目眩がするほど妖艶で美しかった。ヒロミちゃんは明るく愛くるしかった。倫行は涙ぐんでいる自分を、少しも恥ずかしいとは思わなかった。

「まるで、わたしたち家族みたいね」

ユリさんがヒロミちゃんの髪に顔を埋めて、そう言った。

「わたしが母親役かぁ、ちょっとだけ、不満だなぁ」

ナオミさんがそう言った。

ヒロミちゃんが、泣き崩れた顔のまま、笑ったようだった。

どれほどか経って、ナオミさんが倫行に向かって、はっきりとした口調で言った。

「北海道は無理のようね」

「ええ」倫行が答えた。

「ここからなら...」

「白神か、十和田ですね」

「薬は...」

三人が揃って同じ催眠剤を取り出した。

「今夜はここに居ましょうか。明日の昼前になってインターを降り、何処かホームセンターでコンロと練炭を買いましょう。地方ですから、それのない店は先ずないでしょうよ。夕方までに着けば...」

倫行がそう言い、二人が頷いた。それをヒロミちゃんがそっと見ていた。

ナオミさんがヒロミちゃんを軽く抱き、背を撫でた。

どれほどか経ってナオミさんが、とても静かに言った。

「もし生きていたら、みんなで一緒に暮らしましょうね」

みんなが頷いた、それが有り得ないことも承知の上で。